知覧武家屋敷群の生け垣

日本の源流
再発見

File 34 鹿児島県南九州市、鹿児島市

鹿児島の地に今も残る、武士の生き様

2019年5月、「薩摩の武士が生きた町 ～武家屋敷群『麓』を歩く～」が、日本遺産に認定されました。鹿児島県には、薩摩藩ゆかりの「麓」と呼ばれる武家屋敷群が数多く残っています。ゆったりと麓を歩けば、薩摩武士たちの往時の勇姿が目に浮かぶようです。

「知覧麓（ちらんふもと）」を巡り、江戸中期にタイムスリップ

九州の南端に位置する鹿児島県は、島津家のお膝元であり、西郷隆盛ゆかりの地でもあります。鹿児島（鶴丸）城は、天守のない屋形づくり。これは「薩摩は城をもって守りと成さず、人をもって城と成す」という薩摩藩の思想によるものでした。この鹿児島城跡には、今もなお西南戦争の弾痕が残る石垣、複数の門の跡、歴史とともに生きてきた巨木が残されています。堀の石垣を覆う青々とした、つたやこけもまた、脈々と流れてきたはるかな時間を静かに物語っているようです。

関ヶ原の戦いで勝利を収めた徳川家康が天下を取ると、江戸幕府は「一国一城令」を公布しました。これに対し、薩摩藩初代藩主の島津家久は、居城である鹿児島城を本城としつつ、薩摩藩全体を防衛するための外城（とじょう）として、武家屋敷群を藩内に整備していきました。

現在、鹿児島市の鹿児島城跡を中心に、この武家屋敷群が県内各地に点在しています。その一つが、薩摩半島の南、南九州市知覧町郡に残る「知覧麓」です。母ヶ岳の優雅な姿を借景に取り入れた、池泉庭園と枯山水庭園のたたずまいをはじめ、折れ曲がった本馬場通りに連なる石垣や生け垣からなる整然とした町並みから、「薩摩の小京都」と呼ばれている優美な麓です。

地区内にある7つの庭園は、枯山水の伝統美が今も残り、時代の息吹を感じさせてくれる希少な場所として、国の名

All Rights Reserved,Copyright ©2020,Hitachi,Ltd.

▲ 探勝園
築園当時は千秋園と呼ばれていました。
園内には、明治維新に貢献した島津久光公（写真）と忠義公父子の銅像があります

▼ 鶴丸城御楼門（ごろうもん）
1873年の火災で焼失。復元工事により2020年3月末に日本最大級の城門が完成予定です。屋根に据えられた鯱（しゃち）には火災から守る魔よけの意味があり、焼失前の写真を基に再現されています

▲ 知覧武家屋敷庭園／西郷恵一郎庭園
「鶴亀の庭園」の異名があり、江戸末期の作庭と伝えられています。
枯山水で構成された情趣（じょうしゅ）あふれる庭園です

▼ 水車からくり
豊玉姫神社では毎年7月の六月灯で、水車からくり人形が奉納されます。
水車を動力とした人形劇は、全国でも鹿児島にしかない無形民俗文化財です

勝に指定されました。手入れの行き届いた風情ある庭園もさることながら、歴史を感じさせる武家門や、当時の暮らしをしのばせる家屋もまた、往時の記憶を今に伝えます。

島津家28代当主島津齊彬（なりあきら）公を祭る照国神社に隣接する「探勝園」は、かつて鹿児島城の二の丸があったとされています。豊かな緑に囲まれた園内には、島津久光公と忠義公父子の銅像が建ち、堂々たる姿に圧倒されます。ゆったり穏やかな時間が流れる庭園の雰囲気を残し、周辺住民の憩いの場としても親しまれています。

豊玉姫神社で7月に行われる六月灯では、知覧の夏の風物詩として「水車からくり」が有名です。用水路の流れで回転する水車を動力にした人形たちの細やかな動きは必見。また、神話やおとぎ話をモチーフにした演目は、毎年趣向を凝らしており、多くの人を魅了しています。

ココに注目

1899年創業の徳永屋本店では、旬の素材を使ったさつま揚げやかまぼこが地元で愛されています。中でも歴代藩主島津家の家紋（丸に十の字）を配した「島津揚げ」は、同店のオリジナル。手間を惜しまず仕上げたこん身の一品です。

日立グループ事業所紹介

今回訪れた鹿児島県鹿児島市には株式会社九州日立システムズ 南九州支店があります。コンピューターと通信を融合したトータルシステムソリューションのご提供、システム構築から工事・保守メンテナンスまで一貫した責任体制でフルサービスを実施しています。

株式会社九州日立システムズ 南九州支店
鹿児島県鹿児島市山之口町2番30号 鹿児島第一生命ビルディング 1F
https://www.kyushu-hitachi-systems.co.jp/

All Rights Reserved,Copyright ©2020,Hitachi,Ltd.